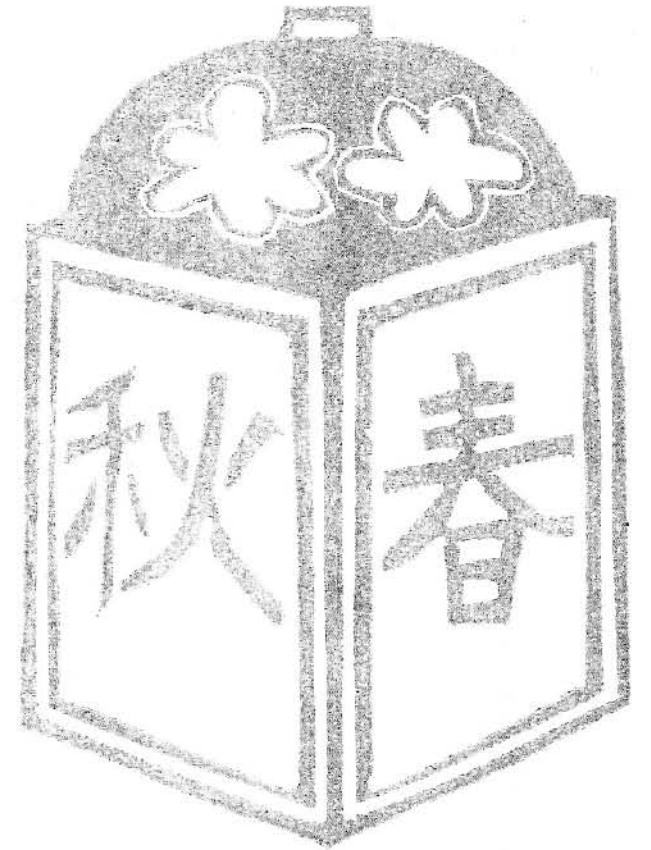


田中貢太郎著

酒・散策・俳句



五升樽記

私が少年の比は自家用の酒の醸造を許されてゐたので、私の家では表座敷の床の間へ荒薦を敷き四斗樽を据ゑて醸造したし、後に吉野河畔で小學校の教師をしてゐて、體操の時間に生徒をつれて谷あひなどを歩いてゐると、山懐になつた處に密造酒がしてあるので、圍ひの筵をはねあげて中へ入り、桶にそへてある茶碗ですくうて喫んだこともあるし、酒はどうして醸造するか位は知つてゐるが、眞箇ほんとうの酒蔵のことは知らないの、佳い機會があつたらと思つてゐるうち、昨年十二月大阪へ往つたところで、大阪の稅務署にゐる友人猪野野氏の紹介で西宮の稅務署に關稅課長の横川氏を訪ひ、横川氏に案内せられて先づ『白鹿』の醸造元を訪うた。西宮神社の突きあたりを左に折れて小さな運河の右岸、西宮港に臨んだ鐵筋コンクリートの冷凍裝置の近代的醸造機を案内してもらつた。まだ季節が早くて醸造に着手してゐないので藏の中はがらんとしてゐたが、それだけしみじみ酒藏の中を味はふことができた。麴室、洗米場、槽場、壘詰工場。貯藏室には紙の目張をした三十

すぐ出ていただきたいのであります」

北九州は大丈夫だという。油の補給とタンクの応急補修だけしてもらって、大村へ向うことにし、休む間もなく翁たちは急遽種子島を離陸した。

脚上げの電動装置も故障していた。何百回も手廻して捲き上げなくてはならなかった。天草を越え、右に雲仙、左に長崎の町を見て大村に着いたのは午後二時ごろであった。翁はもう、くたくたになつていた。戦艦を一杯やつつけ、命からがら疲れて帰つて来たというのに、彼らは此処でもまた追われる身であった。

大村の基地には、霞ヶ浦時代赤トンボの腕をきそつた同期の則武中尉、龍谷大学の先輩で局地戦闘機雷電の隊長南谷大尉ら、思いがけぬ古馴染みが出て、「そうか、やつたか」と彼の手柄話を聞いてはくれたが、鹿児島島の空襲警報が解除になつたのと入れ替りに長崎地方が空襲警報発令になり、所属のちがう彼らは腰を落ちつけているわけに行かなくなつた。

大村を出、再び天草を越えて、出水基地の東側から国分上空へたどりついた時には、日が暮れた。

飛行場のまん中にたくさんカンテラがともつていた。全部、空襲でやられた穴の位置を示す灯であつた。着陸出来ない。

十五キロほど離れた、烏帽子岳の麓の溝辺というところに、第二国分と呼んでいる秘密基地がある。辛うじて翁は其処へ降りた。

種子島で立小便をした記憶はあるが、それ以外一度も小便をしていないことに気づいた。

浜紙で作つた機上用の小便袋はきれいなままであつた。

第二国分の宿舎で飯を食わせてもらい、山地用の小型四輪駆動車で山道を下り、隊へ送られる間に、彼は車の中でぐっすり寝こんでしまった。

「指揮官、着きました」

と言われて眼をさますと、暗い国分基地の隊門の前であつた。

長い間留守にしていたような気がした。

「翁中尉が帰つて来た。翁中尉と山村中尉が帰つて来た」

六〇一空の隊員たちは、驚きの声をあげて二人を迎えてくれた。

「あ、翁中尉」

と、従兵は、幽霊でも見たような顔をした。

二人の持物は遺品扱いですつかり片づけられていた。

戦艦突入を報じた直後に無電のアンテナを切られたらしく、あとの電報は一通も基地に届いていなかった。

中平少佐が呼びに来た。

「よかつたな、よかつたな、貴様」少佐は言った。「セタ連送を聞いてから、十時間以上になる。とても生きてはいまいと思つてた。取つときの白鹿だ。飲め、飲め。飲んで今夜はゆっくり休め」

彼ら以外、柴田中尉、鳥飼中尉、五人の下士官搭乗員は、一人も還つていなかった。第

前は帰りということになる。酒飲みのエゴちゆうのは、こういうもんや。

「放つといてくれ。おれだけの世界に生きていたいんじゃ」

ちゆうて、友を帰らせてしまおうなる。

ところが、酒の友と別れるのは淋しいというわけで、

「もし、お前さんにやさしい気持があつたら、明日の朝にもう一遍訪ねて来てくれや。そいで、ギターを爪弾いてくれたら、どんなに嬉しいことやろか」

というとするわけ。

この気持、酒飲みやつたらようわかると思うで、ほんまに。酒飲みの甘えとでもいうたらええかいな。

ま、あんたも酒好きやつたら、最低このくらいの酒と詩の話をして酒の肴にして飲んだらどうやろか。そうすると酒の味がまた一段とあがるような気がするのやが……。

白鷹の醸造元（北）辰馬家に生まれ、三代目悦蔵として家業を継いだ人が、博物館を設立した。

「辰馬考古資料館」。資料は、考古遺物と日本画の

富岡鉄斎の作品群の二つから成り立っている。鉄

斎と言えば近代文人画の巨匠として有名だが、神

職に仕え大鳥神社の宮司をしたこともある人だ。

毎年春には鉄斎作品の大作・逸品、秋には縄文土

器・石器・銅鐃などの考古資料が展示される。

重要文化財、重要美術品も多数。考古学的にも

美術的にも大変価値の高い博物館である。鉄斎作

品は鉄斎と親交のあつた初代悦蔵の蔵品であり、

考古資料は考古学者であつた三代悦蔵の収集品を

中心とする。

鉄斎画の持つ、人の技とは思えぬ、風格の色調

と筆致。そして太古の神々への祭事に使われたと

いう銅鐃の持つ、犯しがたい威厳と端然とした美

しさ。これらが互いに呼応しているかのように思

えるのは、幻なのだろうか。

この辰馬家が代々造り継いできた酒、白鷹は、

伊勢神宮の「御料酒」である。伊勢に祀られる神々

は、現在も毎日、朝夕二回の食事をとられるのだ

が、御料酒とは、その際に供せられる酒のこと。

豊受大神宮・外宮（とようけだいいじんぐう・げ

くう）の御饗殿（みけでん）というお食事ところ

で、天照大御神と豊受大御神らをはじめとする、

神々の食卓



極上 白鷹

六人の神々が、神職の人々が身を清めて支度した料理を食される。この神聖な食卓に出される酒が

全国でただ一銘柄、白鷹のみ、という栄誉である。

太古の神々に思いをよせ、その威光を後世にも

伝えたい、という三代目悦蔵氏の遺志。その意も

継いで伝統の方法で、今日も醸されていく酒だ。

——伊勢の御神々、おいしゅうございますか？

我が国の神々は、明るくおおらかだ。美食を楽

しみ、酒を好む。時には、舞を舞ったり、歌に興

じるやも知れぬ。朝に夕に、食卓を囲む神々の、

華やかなぎらやかな笑い声。神宮の森のしじまの

中に、ふと聞いたような。響いたような……。

ヒマラヤへも登りました。山また山を征服するように、千勢子さんを征服したい……今となつてはそれが僕の悲願です。千勢子さんからこんな言いたい放題の手紙を貰つては、今更ひっこみがつきません。昔から男と女の關係は、男の愛と情熱の強さによって、勝負が決まるものと思つています。僕はあなたを愛することに於て、誰にも負けない自信があります。これを言いかえると、あなたの殆んど横暴に近いようなおことわりの手紙を讀んで、僕ははらわたが煮えくりかえり、同時に千勢子さんを僕のものにしないではおかないという決意が固まつてきたのです。ここで千勢子さんとの縁談を放棄することは、僕の一生がすたることです。いかなる障害を乗り越えても、僕はあなたを獲得する……。

最後に、ご両親との交際にヒビが入らないようにとのご希望ですが、ご心配はご無用です。僕はパパもママも気に入入り、将来自分にはない両親の代りに、心から敬慕を捧げるつもりで居ります。

中森は竜五の会社へ電話をかけ、夕食を築地のうなぎ屋へ誘つた。

階下は腰掛の食堂だが、二階はいくつかの座敷になつて

いる。「お誘いはしてみただけれど、まず不可能と思つていたので

す」

と、中森は言った。

「いや、こちらでも、もうそろそろお目にかからなければならぬと考へていました」

と、竜五は答える。すこし堅くなつて、上方弁がひっこ

んでいる。「じつは千勢子さんからおことわりの手紙を頂戴したんで

す」

「それは知らなかった。いつの間にそんなことをしたんだらう」

「それで、僕も猛然と憤慨して返事を書きましたが、何か仰有つていませんか」

「いや、なんとも」

「僕としてもあんな手紙を書いたのははじめてなんです。ポストへ入れてから後味が悪くて困りました。直情主義も事によりけりだと思つて……」

竜五は腹が立つてきた。両親に無断で勝手に縁談をことわるさへあるのに、中森からの憤激の返事を貰つて、なお黙つている千勢子の態度が、親を親とも思わない高慢そのものであると思つると、握りコブシがブルブル慄えるようであつた。

そこへお銚子が運ばれてきたので、中森がお酌した。竜五は盃を受けてから、こんどは中森の猪口に酒を注いだ。

二人は「どうも」と言つて、猪口を干した。

「いい酒だな」

「はい、白鷹です」

「いまのお話だが、千勢子も怪しからん奴や」

「しかし、なかなかお立派です。おことわりの手紙も筋が通つていました」

「何を理由にこつたんでしょう」

「申上げていいでしょうか」

「どうぞ……それを伺わないと、僕も腑に落ちないから」

「旗野という詩人の名前は書いてございませんでしたが、つまりそういう過去があるから、僕の前には出られないという意味のことが、ざっくりばらんに書いてありました」

「自分でそんな秘密を告白しているんですか、どうかして

いる。なるほど、それじゃ僕らであなたをペテンにかけて

とお思いでしょうな。なんと言われても申訳は立ちませ

んが、やはり娘可愛いさで、そういう過去はなるべく隠して

やりたい。そんな親心から発したことです」

竜五は首筋に冷汗が流れるのを感じた。

それにしても、中森が旗野という固有名詞まで知つて

るのには驚いた。じつはまだなんにも知らずに古宮家へ結婚を申込んだとばかり思つていたのである。

うなぎが焼けてきた。目方のかかる大串である。しかし、

竜五は怒りで胸がいっぱいになり、すぐに食べる気にはな

らなかつた。

「冷めないうちにどうぞ」

「でも、いまのお話のつづきをもうすこし聞きましょう」

「いえ、それだけのことなんです。あなたが嘘を仰つたとは思つていませんから、思い過しをしないで下さい。旗野のことは前から知つていたんです」

「どこで聞かれたんですか」

「僕の妹が四谷のクッキング・スクールへ通つていまして、あの学校では千勢子さんと旗野のことは大分有名です」

「なるほど」

「今年の夏、妹がその仲間と河口湖の富士ビューホテルへ行きまして、偶然食堂で千勢子さんにお目にかかつたときも、旗野さんと結婚なさるそうで、おめでとくと申上げたら、ニッコリなさつたと申しておりました」

「こりゃア恐れ入つたな。なにかも承知の上で、あなたは千勢子をもらつて下さるお氣持になつたんですね」

「はい。と言うより、もっと積極的に、旗野なんかに奪ら

れてたまるかとまで思い詰めました」

こんどは中森のほうが強くなる模様で、照れ隠しに、手酌で二杯ほど猪口を口に運んだ。

そこまで知られていては、何をか言わんやだと、竜五の

ほうはすこし落着きが出て、その大串に箸をつけた。

「千勢子の手紙はおことわりしたただけなんでしょね。旗

体温計の目盛をうかがう眼も、体温計をふる仕種も看護婦のそれであった。

春ちゃんの家の中の存在は、急に比重を増してきていた。料理は、春子が熱心に教えこんだが、覚えが早く、たちまちのうちに習熟した。料理法は克明にノートに書きこみ、味つけも巧みになった。

彼女は、みごもった妻の体を気づかい、重い物を持ったりせぬように注意したり、一日一回軽い散歩に出掛けることをすすめたりした。また、ビタミンの注射をしたり、カルシウム剤の服用もすすめた。

「あなたがいるので助かるわ。健康管理もしてもらえるんですもの」

と、春子は喜び、彼女のすすめに素直にしたがって、工を連れて毎日散歩に出掛けていた。

或る夜、玄關のベルが鳴った。出て行った春ちゃんが、すぐにもどってきて、部屋の襖をあけると、

「カンジャさんがいらっしやいました」

と、膝をついて神妙な表情で言った。

こたつに入っていた圭一と春子は、顔を見合わせ、

「カンジャさん？」

と、圭一がたずねた。

「はい、カンジャさんです」



酒色のこと

圭一の父は、かなりの量の酒を飲んだ。愛飲していた酒は白鷹で、顔をしかめて飲む様子から酒はにがいのものだ、圭一は幼心に思った。

三十歳を越した年齢になって思い返してみると、父はかなり荒い酒飲みだったことを知った。親しい者を十人近く連れて飲み歩いたり、四斗樽を据えて酒宴をひらく。待合遊びをして外泊することも多いようだった。

酒に伴う失敗もあったが、父の癖は見知らぬ人を家に連れてくることであつた。夜おそく、父は、未知の男と上機嫌で帰ってくる。そして、笑い合いながら酒を飲み、やがて男はふとんの敷かれた離室に入つてゆく。

翌朝、母をはじめ家族は、興味深げに父と男の起きてくるのを待ち受けている。男が、昨夜の勢はなく恐縮して離室から出てくる姿を見ると、起きて茶をのんでいる父はぎくりとしたように男の顔を見つめる。不意に昨夜の記憶がよみがえららしく、父も坐り直して神妙な顔で男と向い合う。

と言つた直後、彼女は不意に顔を伏せると首筋を赤く染め、「会社の方です」

と言つて、困惑したように忍び笑いをした。

圭一も春子も、カンジャの意味に気づいて笑い出した。彼女の勤めていた医院では訪れてくる者の大半が患者で、春ちゃんはその訪れを主人である医師に、そんな口調で告げたのだらう。その口癖が、社員を患者と言いまちがえたのだ。

玄關に出て行くと、営業部の部下が二人並んで立っていた。一人は病気で休職をしていた社員で、全快した挨拶に同僚とやってきたのだ。その顔色はまだ冴えず、春ちゃんはその社員の顔色をみて錯覚を起したにちがいがなかった。

圭一は、こみ上げる笑いをこらえながら彼等を応接間に招き入れた。

男は、

「昨夜は、誠に……。結構なお住居で……」

などと、曖昧なことを口にし、名刺を差し出し顔を深々とさげる。

「こちらこそ失礼を……。よくお休みなれましたか」

父は、眼のやり場に困つたように頭をさげる。

「では、これで失礼いたしますです」

男は、母にも鄭重な挨拶をし、背をまるめて匆々に玄關の外へ消えていく。名刺は、教員、官吏、会社員などまちまちで、時には二度も来た小学校校長もいた。

兄や弟はほとんど酒を飲まず、酒豪であつた父の血は圭一のみを受けつがれた。が、父の酒にくらべれば、圭一の酒は特徴もない面白味に欠けたものであつた。

盗み酒をしたと言つてもそれは梅酒だったが、小学生の頃に少しずつ飲んで一本をからにしてしまった。そして、中学生時代にはビールを飲み、病氣をした後大学に通学するようになる。すっかり酒に親しむようになった。若さ故に飲むことの節度も知らず、友人と飲む時は一人でウイスキーの瓶一本をあけるのが常であつた。また焼酎をコップで十三杯飲んだこともあれば、銚子を二十七本並べたこともある。

しかし、そうした悪い飲み方をしたのは一時的で、かれは会社の同僚と飲む時も、酒量はかれらと同量の酒で酔つた。

主ふり

新むろの壘すがしむ、わがをれば、

「こた、ほつ枝の花ぞさきける、

こた、しづ枝の花ぞさきける。

「となりのいもじ」より酒をたまはる

この酒はいづこの酒ぞ。

みこころを難波難波の灘の

黒松の酒、

白麩の酒。

父ふり

庭んべは

饒黄んざくらもさいたるを、

わが子よ、這ひ來。

遊ばなん。

おもちゃには何よけん。

風船、小鞠、笛よけん。



発見

自分の生活のなかに「発見」がなかなかないということを時々考える。新しい「発見」をしているひまなどなかなかないほど忙しい世の中であるというわけか。

先日、わが愛する大塚の居酒屋、江戸一のおかみさんが、樽のなれぐあい、木香きかの乗り加減を見はからって届けてくれた極上の白鷹に酔って、年に一度もめぐり会えるかというほどに快く陶然となった。その仕合わせな刻々のなかで、見るともなく庭を見てみると、暮れなずむという常套じょうたう的てきのいいまわしがまさに当てはまるような薄暮のなかへ、少しづつ少しづつ沈んで行くつつじの白と赤、山吹の黄、なにやらの淡い紫、そういうものを、毎日毎日眼にしていながら実は本当には見ていなかったのだという感覚が、ふいと湧いた。そういうものの美しさを、驚いたように発見しつつあるという、それは喜びであった。そして事実、その翌日以後、庭の花々を眺める自分の眼が前とは少し違ってきて来たことを、私は感じている。

以上は「発見」の例として取り上げるべく、余りに些細なケースだろう。さし当たりこんな例しか思いつかぬほど、わが生活も落ちつかぬかと嘆かわしいのだが、それにしても、「発見」を英語まがいまがいに、デイスカバー何とかという言葉がはやっているが、私にいわせればあんなものは発見でも何でもない。どこそこへ出かけて行って、今まで見てなかったものを初めて眺めるといふ、ただそれだけの仕掛けである。

ただ、そういう仕掛けを非難する必要はたぶん別になのであって、「発見」はこちら側の問題である。他人にとっては何でもない普通のものである、あるいは自分にとってこれまではそうであったものが、ある時から新しい価値を自分に対して持つてくる。この「発見」の喜びは、それを体験した者でなければ分らない。それはすぐさまどういう役に立つというものではないが、何やら意味を持つている。ことに近ごろのごとく、新奇珍奇な万象が次々とめまぐるしく眼の前を通り過ぎて行く世の中では、大きな意味を持つている。

「脱」

種田山頭火や尾崎放哉などの俳人や、わが郷里熊本くまもとの歌人宗不旱むねふせのことが、近ごろあちこちで話題になっているのを見かける。それをブームとまでいいいかどうか、とにかく現在刊行中の『山頭火全集』のごときは相当高価な七巻ものだが、これらの人々に共通な点は、いずれも戦前、放浪の果てに行き倒れのごとく死んだ人たちであるということだ。そしてこの人たちの、確かにすぐれてはいるのだから作品の背景に、もし放浪という事実がなかったら、それらの作品は狭い範囲の人々に深く愛されこそすれ、仮にもブームと呼ばれるような現象を起しはしなかっただろうと思われる。

少々大胆ないいかたをすると、彼らの脱人生的な行動が、今日流行の「脱」をあこがれるムードにたまに乗ったことによって、彼らの作品の本当の価値が、時として狂わせられてはいしまいかという危惧をさえ感じさせられないでもない。

彼ら一人一人の伝記に当たって見たわけではないが、私が思うに、彼らはその放浪の境涯を決して楽しんでばかりはいなかっただろう。というより恐らくそれは、彼らにとって苦渋に充ちた毎日だったに違いない。

とも譲りませんものねえ、課長が、そんなら一日休暇をやるから、もう一遍徹夜で呑みながら決着つけて来いと言うて、いやいやいや、先生どうぞどうぞもう一献——、恐れをなした私は、前言齟すやうですが、まことにどうも不調法で、そればかり繰返して、何とか急性アルコール中毒にならずに宿へ引き上げることが出来た。

海軍にも酒豪がゐた。アメリカ海軍は艦内での飲酒、今も昔も原則として一切禁止だが、負けた日本の方はその点すこぶる寛大で、酒にまつはる逸話綺談が一杯残つてゐる。諸事英国流といふか、艦長室や士官室にはウイスキーが置いてあるけれど、くつろいでたつぷり飲むとなれば、やはり日本酒であつた。

「それをそんなに飲まないよ、海軍では出世の道が開けんのか」

一族の長老から、いい加減にしろと言はんばかりの苦言を呈されて、

「そんなことはありませんがね、酒は私の好物で、好物をたしなんでもれば自然気持が和んで、人間関係がうまく行くんですよ」

と答へた艦長さんもあるし、

「酒の上の失敗は、時々やつて、人に隙を見せた方がいい。さうすれば部下が、ほんたうに心服してついて来る」



と、酒飲み独特の処世訓を披露した司令官もある。狂言の「棒しばり」ではないが、飲める口に飲むなど言つても、何とか飲む方法を案出するのは、士官も水兵も変りなかつた。次の航海、日数が少し長くなるといふので、「菊正宗」と「白鷹」の菰かぶりを沢山積み込ませ、通路へ並べて、盗み飲みされないやうに番兵をつけたことがある。それが一週間後、樽の中の酒量、ひどく減つてゐるのが分つた。

「封印もして、二十四時間交替で番兵を立ててをるのに、何故減るか」

「分りません。氣候が乾燥してをる為、蒸発するのではありませんでせうか」

見廻りの甲板士官と当直下士官のやりとりを聞いてゐた年輩の掌帆長が、にやにやしながら口をはさんだ。

「泥棒に泥棒の番させて安心してたつて駄目ですよ。夜中に番兵が、錐で穴あけて、仲間と廻し飲みしたあと、割箸の削つたのを穴へ差し込んで置くんです。いくらでも減りますよ」

いづれも、第一次大戦終了後、勝者日英米三大海軍国の間にワシントン軍縮条約が締結され、世界のネイヴァル・ホリデイと言はれたのどかな時代の話である。棒給やボーナスを貯金に廻さうなどと、けちなこと考へるなどいふ中少尉連中が三、四人一と組になつて、入港地の、海軍御用の旅館へ乗り込み、四斗樽一本と湯船を二つ用意させる。風呂場に並べた片方の浴槽に四斗の酒をあげて酒風呂を立て、真水の風呂で暖まつてからこちらへ入り直すと、香氣馥郁として実に心地よい晩酌前のほろ酔ひ状態が出来上つた。「四斗樽一本、二十四円

↓

ときのことなのに、じつに鮮明である。

私は東京の日本テレビの近くで育ったが、祖父が岡山に住んでいて時折上京してくる。酒好きで長々と晩酌をするので、その用意に手数がかった。いつもそうなのだが、あらかじめ電話がかかってきて、

「わしは、黒松白鷹しか飲まんからな」

と言い、さらに念を押すのだそう。

「黒松白鷹という酒があるから、それと間違えないように」

大人になってわかったが、この二つは同格の上等のお酒である。祖父は黒松白鷹を貶めてそう言ったわけではなく、自分の好みにたいして頑固だったのだろう。頑固そのものの明治人間で、早起きして冷水摩擦という人物だったから、私は甚だ苦手だった。

上京してみると、さっそく晩酌をはじめ。酒の肴を並べて、ゆっくり飲みはじめる。その肴はなにかあらかた忘れてしまったが、油揚げもしくは生揚げを炭火で焼いたものに大根おろしを添えたものだけは覚えてる。子供に食べさせてもいいようなありふれたものだが、当時の私ははじめて見た。いかにも旨そうで、羨ましい。

そのうち、重箱に入った鰻の蒲焼の出前が届く。ついでに鰻丼を取ってくればよさそうなものだが、そういうことにはならない。祖父の鰻重には飯は入っておらず、蒲焼を肴にいかにも旨そうに飲みつけ、上機嫌になってゆき、やがてこう言った。

「食い物は、もう何もいらんぞ。なんにもいらん、もし出しても、わしは食わんぞ」
酒のほうは飲みつけけているので、なにかつくって出さなくては恰好がつかない。

料理の皿が出ると、

「なんにもいらんと言ったではないか、わしは食わんぞ」

と言うが、やがて皿はカラになってしまふ。催促しているようでもあって、子供心に可笑しくて仕方なかった。

祖父はこういうとき、

「どうだ、お前も一杯だけ飲んでみないか」

と、孫に盃を渡すタイプではなかったの、お酒の初体験はこのときではない。

私ははじめてお酒を飲んだのは、静岡の旧制高校の寮生活をしていたときだろう。日米戦争がはじまったばかりの勝っているときだったが、すでに物資は欠乏していて、街の飲み屋では一人につきお銚子二本までときめられていた。飲み屋を五軒まわると、酒一升というわけだが、あまり酔わない。

自分は酒に強いとおもっていたが、後になって気づいたことがある。あの物資欠乏の時代、客に売る酒に水を加えない筈はない。なにしろ、こちらは初心者の高校生だから、半分は水だったのだろう。

染めに出すのり置き小紋の柄を、選んでいた。

南条は、中背の色の白い、眉毛の美しい学生だった。もう一人の津田というのは、背は低くかったが、瞳のはつきりした、頭のよきそうな男だった。二人ともまだ、二十歳ぐらいで、若さにあふれていた。苦勞のあとのないみずみずしい身体が、康吉には、まぶしいほどだった。男の自分がまぶしいくらいであってみれば、それは当然、お喜多にも強烈な印象になっているのだと思うと、康吉はやはり妬ましい気がした。悪い虫のつかないうちに、早く自分の女房にしてしまおうかという気がときどきした。

やがて秋の天候がすっかり定まって、毎日、空高く晴れ渡って菊日和がつづいた。春から夏へ、とかく風の多いこの土地では、空気の澄む秋の季節には恵まれていた。

ある日、市五郎は組合の寄合の帰りに、康吉を、中川という鰻屋に誘った。いきのいい、身のあつい蒲焼が名物で、東京人の口に合うものは、ここ一軒だった。裏に小意気な座敷があって、大工町の箱も入った。市五郎は座敷へ上ると、白鷹と中申を命じて、自分が床の間のほうへ坐った。

「実はね、ものは相談だが、ご覧のとおり、私も着のままで焼け出された。どうやら、お前の工夫で、梅村の看板は出してみたが、田舎もの相手の商売では、はかがいれない。昔はお前が考案したソラ若納戸という色気が流行して、下町から山の手へ東京中の玄人も素人も煙にまいた時の話は、まったく夢だ。貧すれば鈍するで、この間の片

ぞめ小紋なんぞも、私は一日考えて、とうとうまじな智慧一つうかんで来ねエありません。ところが実は少々金の要ることができたんだ」

と、市五郎は切り出した。女中がお銚子を二本はこんで来た。久しぶりのお酒だった。

「ついちゃどうだろう。この間、下市の呉服屋から預りの、白生地きじの古典縮緬ちりめん、紋衣もんい裳しやう、それから梅屋敷から来ている加賀友禅やうぜんと、縮子縮緬しんすず、みんな合せると十反ばかりになる。あれを福田屋にでも預ってもらって、一時融通できればいいんだ。相談というのはこれだ」

「へい」

どんな話かと心配して来たが、やっぱり悪い話だったと、康吉はがっかりした。

「あずかりものをまげるのは、紺屋こやのご法度はつどにはちがいないが、そりゃ昔の話だ。尾羽おはうち枯した梅村市五郎には、もうそんなしっこいはない。それより欲しいものは金だ」

「……………」

「頼むよ。さしあたって、百両ほどの金がどうしても必要なんだ」

「……………」

「百両が無理なら、八十両、——七十両でもいい」

市五郎は手を合した。康吉は何と答えていいかわからず、胸がいっぱいになった。黙

絵を巻いて渡したがかの男、前に懲りているのでしきりに手で触ってみる。側の者にも幾度も念を押し、今度は鼻で嗅ぎ始めた。山を嗅いだのはこの男が始めてであった。ようやく安心して持ち帰ったが、今度は誰に見せても立派な富士山だから喜んで、表装をして持っていた。富士山を嗅いだ話は、おそらく空前絶後だろう。

支那と信濃の山

明治四十三年六月、寺崎広業、横山大観、山岡米華の三名が打ち揃って支那漫遊の途に上った。

この旅行は一月半ばかりの日数であったが、おのおの得るところ甚大だった。旅程は上海、蘇州、杭州を見て、南京に行き、揚子江を漢口までさかのぼり、さらに上航して三峡に近い宜昌まで行った。それから漢口から汽車で北京へ行き、八達嶺へ登って万里の長城を見て帰った。

支那旅行の収穫として、その年の第四回の文展へ「長江の朝」と「長城の夕」を出し、翌年は「支那の風景」を出し、さらに大正元年には「瀟湘八景」を出品した。この年には期せずして大観も同じく「瀟湘八景」を出品したのでいっそう世間の評判になった。

広業は旅行好きで、ほとんど日本全国歩いたが、ある年信州の上林温泉に遊んだところが、その土地が非常に気に入ってその後はしばしば上林へ行った。上林へ行ったのは門人町田曲江まぢた せきこうがその近くの出身である縁故からだった。

第三回文展に出した有名な「溪四題」は上林の旅館廳表閣しんびょうかくでかいた。

上林が非常に気に入ったので、ついにここへ別荘を造営した。それが落成したのは、大正三年七月だった。別

荘はそう大規模というでもないが、三十畳ぐらゐの画室と他に幾室かあった。広業は例年夏を上林で暮して、一年中の仕事をするのが例となった。文展の製作などはほとんどここでやった。

信濃の山を題材にとって評判になったものにはまえの「溪四題」「秋山雨後」「高山清秋」「信濃の山路」「白馬岳八景」など枚挙にいとまあらず。

別荘生活は、朝六時起床、入湯、朝飯後しばらく習字をする。習字は多年の習慣で、彼は字も上手だった。書家の墨を摩して、しかも俗気のない良い字を書いた。

昼中画作をする。彼は健筆であった。晩年はどんな大作でも下絵などは作らず、屏風などへ焼炭でザッと下書きをして、すぐそれへぶっつけにかいた。普通の絹本ぐらゐはわけなくできてしまう。晩年の広業の画料は、三尺絹本極彩色美人画が三千元、二枚折り屏風一双二千元ぐらゐまで騰あがった。当時としては破天荒の画料だった。しかもグングン絵ができるから、金は流れるように入ってくる。

広業が上林にいる間はたくさんの人が訪問して来るので土地の旅館が賑わった。夜はそれらの人びとが、別荘へ集まって来て酒宴をする。山の中においても、全国から名産や珍味を送って来るものが絶えないから、食べ物に不自由はない。そうした珍品をたくさん並べて酒を飲む。身の廻りの世話は愛妾おゆうがついて来ている。人生の幸福の限りを広業は味わっているのだった。

あるとき、彼は東京から大勢つれて上林へ行った。お気に入りの下谷の老妓おしゅんらもついて行った。当時はまだ電車がなく汽車を下りるとガタ馬車に乗って行くのだった。そのとき広業は東京から持って来た白鷹の瓶詰を他人に持たせず自分で後生大事と抱えていた。

「こいつはいちばん大切だから」

すると、雨あがりで道路が悪かったので途中で馬車が転覆して一同田の中へ抛り出され、それぞれ怪我をした。